ますます高まる研修機関の重要性
～東洋医学独自の医療体系を形成できる鍼灸師の育成を目指して～

鍼灸師の卒前・卒後研修をどのように行うか――。養成施設が急激に増加し、毎年資格取得者が大量に現れる時代を迎えた今、「質の高い鍼灸師」を生み出すための研修機関の必要性はますます高まっていくと思われます。そこで、このような現状に鑑み、数年前から「日本伝統医学研修センター」を立ち上げて意欲的に新米鍼灸師やその卵たちの研修を継続的に行ってきた相澤良氏を訪ねてみました。（編集部）

「人材の育成」は恩師との約束

「なぜ、５年前に新人のための研修センターを設立したのか。それは恩師である素明先生との共通の思いがあったからです」

東京都・代々木にあるビルの一室。昨年の秋に開かれたばかりの、まだ真新しい雰囲気の漂う治療院にて相澤良氏は力を込めて語る。

相澤氏は、経絡治療の発展に力を尽くした故岡部素道氏とその子息である故素明氏の２人に師事し、自身もまた経絡治療学会の中枢で長年活動してきた人物。昨年10月に、十数年にわたり鍼灸師としての技量を練り上げてきた渋谷にある岡部医院（現在は岡部鍼灸治療院）から独立、代々木に自らの治療院を開設し、同時に５年目を迎えた日本伝統医学研修センターも新たな場所で再出発を遂げた。

「素明先生は、鍼灸界全体がどうしたら良くなるか常に考える人でした。そのために時代を読んで今どうすべきか明確なビジョンを持つことの重要性を常々説いていました。研修センター構想は、素明先生との話し合いの中から出てきたものです。経絡治療という古典治療は内臓疾患や自律神経症状、喘息やアトピーといった幅広い病態を治療できるメリットはあるけれど、古典理論や脈診・腹診そして補瀉といった多くの技術をマスターしなければならないという難しさを持っています。さらに場当たり的な治療ではなく治療方針と根拠のある治療をするとなれば、きちんとした病態把握をするためのトレーニングも欠かせません。鍼灸は臨床の学問である以上、実際に症状を持った患者さんを治療する中で、理論や技術がどのように具体化されるのか、ほんとうに鍼灸は効くのか、さらに医療人としての人間性をも鍛える、そういう施設が必要だろうと。

さらに、素明先生には、現在の統合医療の展望も視野に入っていました。医師である素明先生が、医師と対等に伍して行ける鍼灸師を育てたいと考えていたというのは、面白い話と思いますね」

目指すのは「東洋医学のプロ」

相澤氏が岡部医院内にて研修センターを立ち上げたのは、素明氏が突然の病に倒れ亡くなった２カ月後の2000年５月のこと。素明氏が志向

し、相澤氏が現実化したこの研修センターが育成しようとしている人材とは、具体的にどのような鍼灸師なのだろうか。

「これからの鍼灸師は、医師と対等に意思の疎通ができる能力を持ちながら、なおかつ、れっきとした東洋医学のプロでなくてはいけません」

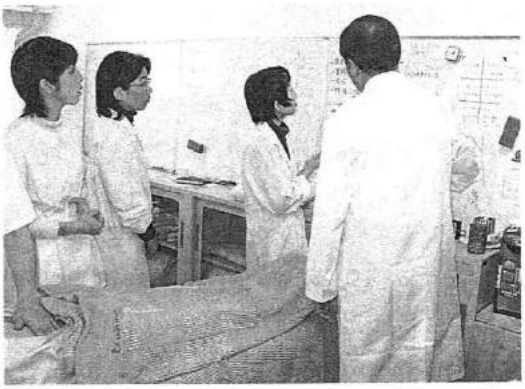
この研修センターでは、医療機関の協力を得てMRI画像の読影や血液検査の数値データを読み取る勉強も行われているという。これらを読み取ることは医師と情報を交換するための共通言語を獲得することであり、相澤氏の考える未来の鍼灸師像では不可欠の要素だという。

「理想的には、医師を頂点とした医療体系の中に組み込まれるコメディカルではなく、あくまで東洋医学というもう１つのピラミッドを形成できる鍼灸師の育成を目指しています」

現場主義の研修センター

さて、実際の研修を行っている場所や内容はどうか。研修センターは相澤氏の治療院からドア一枚の隣にあり、４床のベッドが並ぶ。午前10時から午後７時の間、指導員を含めて10人程度の研修生たちがいた。2004年２月の時点で、

患者の主訴などを次々にホワイトボードに記入していく



研修生にアドバイスをする相澤氏。研修生から次々に質問が出る

研修生は20人ほど。１日あたりの患者数は15人程度で、教育目的なので治療費は無料だが、いろいろ質問されたり触診されたりすることを了解して来てもらっているそうだ。

ここで研修生たちは、本物の愁訴を抱えた患者を相手に、問診から始まり、脈診・腹診などを行って、なぜそのような主訴や所見が発生したのかを分析し（これを「プロファイリング」と呼んでいる）、証を立て、主訴・脈の形・腹診・治療穴・治療方針などを次々とホワイトボードに書き込んだり、指導員や研修生同士でディスカッションをしながら治療計画を立てていく。研修生たちの見解が出たところで、相澤氏がホワイトボードをチェックし、コメントとアドバイスを加えるのが基本的な流れ。初診でも再診でもこの作業を行う。

「ここはアメリカの鍼灸学校のインターン制度をモデルとしています。座学や特定の疾患を仮定した上で行う刺鍼実技と違って、生きた教材を肌で感じられるメリットは大きい。研修生には、ここで『鍼は効くんだ』ということを強く実感してもらいたいのです」

研修期間は最長２年。フリータイム制で自分の任意の時間を研修でき、週２回講義の時間も

ある。研修費は家賃や諸経費の実費として月に２万円のみ。相澤氏によると、「どんなに不器用でも、２年間しっかりと研修すれば、一通りの臨床ができる実力がつきますから、後は自分の力で歩けます」という。この４月から新たに５期生の研修が始まったものの、情熱があり志のある人ならば、途中からでも受け入れは可能だという。資格取得前の学生でもよいとのことだ（患者に刺鍼はできない）。

取材当日にいた研修生らと相澤氏

混合診療解禁が１つのターニングポイント

「これからの時代は、統合医療に対する鍼灸界の取組みが重要になってくるでしょう。研修センターとしては、統合医療に向けたマンパワーの養成ということも考えています。現代医学的所見を理解したうえで、東洋医学という独自の見地から診断治療が組み立てられて、そのうえ実際に治療効果を出すことが求められているというべきです。

鍼灸界全体としていえば、肩こり・腰痛に限らず、さまざまな病態に対して鍼灸は有効であるということを、現代医学の側や国民に向けて情報発信するときでしょう。医療はサービス需要者である国民のものであり、需要者になるべく多くの選択肢を提供し、国民自身に治療を選択してもらうことが基本です。そのためのシステムとしては、現代医学が唯一万能で絶対とするのではなく、むしろ相対化して医療の１分野とし、他の分野として現代医学とは別個の医療として鍼灸がある、とすべきです。現にアメリカ・中国・韓国などでは、東洋医学は現代医学とは異なる体系を持つ別個の医学と、法制度上位置付けられています。混合診療の解禁が１つのターニングポイントになるのではないでしょうか」

相澤氏は繰り返し、質の高い東洋医学の専門家を育成することの意義を説く。そして、これからもその実践を続けていくという。

――養成施設の増加で大きな転機を迎えた鍼灸界。相澤氏らのこうした試みから撒かれた種は、今後どのような花実をつけていくのか。その行方に注目したい。

（〒151-0053　東京都渋谷区代々木２-27-506
TJM相澤・日本伝統医学研修センター）